報告

大学教育の分野別質保証のための
教育課程編成上の参照基準
心理学分野

平成２６年（２０１４年）９月３０日

日　本　学　術　会　議

心理学・教育学委員会

心理学分野の参照基準検討分科会

この報告は、日本学術会議心理学・教育学委員会心理学分野の参照基準検討分科会の審議結果を取りまとめ公表するものである。

日本学術会議心理学・教育学委員会心理学分野の参照基準検討分科会

委員長	利島　保	（連携会員）	広島大学名誉教授
副委員長	箱田　裕司	（第一部会員）	京都女子大学発達教育学部教授
幹　事	長田　久雄	（連携会員）	桜美林大学大学院老年学研究科教授
幹　事	中島　祥好	（連携会員）	九州大学大学院芸術工学研究院教授
	長谷川壽一	（第一部会員）	東京大学理事・副学長
	室伏きみ子	（第二部会員）	お茶の水女子大学ヒューマンウェルフェアサイエンス研究教育寄附研究部門教授
	安藤　清志	（連携会員）	東洋大学社会学部教授
	佐藤　隆夫	（連携会員）	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	原田　悦子	（連携会員）	筑波大学人間系心理学域教授
	松井　三枝	（連携会員）	富山大学大学院医学薬学研究部（医学）　准教授

この報告書の作成に当たっては、以下の職員が事務を担当した。

事務	中澤　貴生	参事官（審議第一担当）
	渡邉　浩充	参事官（審議第一担当）付参事官補佐
	石部　康子	参事官（審議第一担当）付審議専門職

要　　旨

１　作成の背景

２００８年（平成２０年）５月、日本学術会議は、文部科学省高等教育局長から日本学術会議会長宛に「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」と題する依頼を受けた。このため日本学術会議は、同年６月に課題別委員会「大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会」を設置して審議を重ね、２０１０年（平成２２年）７月に回答「大学教育の分野別質保証の在り方について」[1]を取りまとめ、同年８月に文部科学省高等教育局長に手交した。

同回答において日本学術会議は、分野別質保証のための方法として、分野別の教育課程編成上の参照基準を策定することを提案している。日本学術会議では、回答の手交後、引き続きいくつかの分野に関して参照基準の策定を進めてきたが、今般、心理学分野の参照基準が取りまとめられたことから、この分野に関連する教育課程を開設している大学をはじめとして各方面で利用していただけるよう、ここに公表するものである。なお、日本のものと多少異なるが、米国（[2]、[3]参照）や英国（ [4] 参照）でも心理学分野の参照基準を作成している。

2　報告の概要

本報告の各章の概要は、以下の通りである。

(1)　心理学の定義

心理学は、心とは何かを問い、心のはたらきを明らかにする学問領域である。そのために、人間が外界からの情報を取り入れ、理解し、最終的に適切な行動を取るにいたる過程を現象的に、機能的に、また、それを支える脳の機能にまで遡って明らかにすることを目的とする。また、心理学は社会科学諸領域とも深い関係を持っており、基礎的な学問領域であると同時に、基本的な問いへの探求から生じてきた様々な知見を、教育、福祉、臨床、産業、情報技術などの多様な場面へ適用することを目指す実践的な学問としての側面を持っている。

(2)　心理学に固有の特性

純粋科学の課題と現代社会に生きる人間が抱える課題とを探求する心理学固有の視点は、①人間の心について科学的に探求する視点、② 学問知とフィールド知を双方向的に探求する視点、③心理学が直面する社会的諸課題に応える視点の３つの視点から捉えることができる。また、心理学は他の諸科学とは異なる独自の方法を確立し、①学としての厳密性と人の幸福の両立を目指す諸学の要としての役割、②状況に対応するいろいろな行動の普遍的事実を見いだす研究法の開発を行う役割、さらに、③個々に異なる人の特性の複雑な面を捉える役割を担っているのである。

(3)　心理学を学ぶすべての学生が身に付けることを目指すべき基本的な素養

学士課程で心理学分野を学ぶ場合、教養教育の一つとして心理学を学ぶ一般学生と、心理学を専攻する学部・学科生とでは、獲得すべき知識と理解に質的にも量的にも違いがある。一般学生が獲得すべき最も基本的な素養としては、①心のはたらきとは何かを実証に基づいて理解する、②人間に共通する心的作用や行動パターンから、心と行動の普遍性を理解する、③心と行動の多様性と可塑性を理解する、④心理学の社会的役割を理解するという４つがある。

心理学専攻の学生には、これら４つに加えて⑤心を生み出す仕組み（機構）と心理学の諸理論の正確な理解、⑥心理学的測定法と心理アセスメント、心理学実験の修得が、身に付けるべき素養であるが、これら心理学に固有の知識の修得だけでなく、隣接分野との接続についても学ぶ必要がある。また、これらに関わる心理学分野の学びを通して獲得すべき基本的な能力には、心理学に固有の能力として、（ア）人間を総体として客観的に理解する能力、（イ）心の多様性と普遍性を理解する能力、（ウ）人間と環境との交互作用を理解する能力、（エ）人間に関する専門職業人として社会貢献する能力がある。また、ジェネリックスキルには、（ア）人間を複眼的に見る力、（イ）批判的実証的態度、（ウ）問題発見・解決能力、（エ）コミュニケーション能力がある。これらは、心理学の専門家に限らず、社会で活躍する人材にとっても有用である。

(4)　学修方法および学修成果の評価方法に関する基本的な考え方

心理学教育の学修方法は、①心理学の潮流と心の科学への取組みの基礎的理解を目的とする講義、②心を研究する学問知とフィールド知の双方向性を理解する演習・セミナー、③研究手法の技術修得を目標とする実習科目としての実験・実習、④学修の成果を、自らが行う研究活動として結実させ、論文にする卒業研究・卒業論文の４つに分類される。

これらの学修方法による学修成果に関わる評価方法は、学士力の質保証にとって重要な役割を果たす。また、学修成果の評価は、学修者自身の学士力に関する説明責任の基礎となるため、教育する側としては、各授業の学修目標に従って立てられた達成目標の段階を具体的に示すことが必要である。学修者は、その達成目標の段階に沿って、学修成果を自己評価することにより、心理学教育で何を学び、何ができるかの説明責任が果たすことができる。

(5)　市民性の涵養をめぐる心理学的教養と心理学の専門教育

学士課程の教養教育を通して、一定の水準の心理学的素養を身に付けることは、自らを知り社会に貢献できる人材の養成という点から重要である。また、教養教育での心理学の学修は、心理学の効用の理解を深める上で意義があり、学問としての市民性を涵養する上で重要な役割を果たす。心理学の専門教育を通して知識や技術を発揮できる専門家・専門職を輩出することは、心理学の正しい理解を社会に定着させ心理学の社会的貢献を進展させる上で重要である。

目　　次

１　はじめに……１
２　心理学の定義……１
(1)　心理学の定義……１
(2)　心理学の領域……１
３　心理学固有の特性……３
(1)　心理学に固有な視点……３
(2)　方法論における独自性……４
(3)　心理学の役割……５
４　心理学を学ぶすべての学生が身に付けることを目指すべき基本的な素養…６
(1)　心理学分野の学びを通して獲得すべき基本的な知識と理解……６
(2)　心理学分野の学びを通して獲得すべき基本的な能力……８
５　学修方法および学修成果の評価方法に関する基本的な考え方……10
(1)　学修方法……10
(2)　評価方法……11
６　市民性の涵養をめぐる心理学的教養と心理学の専門教育……12
(1)　現実問題に対する心理学の関わり……12
(2)　市民性の涵養に関わる心理学教育の役割……13
＜参考文献＞……15
＜参考資料１＞　心理学分野の参照基準検討分科会審議経過……16
＜参考資料２＞　公開シンポジウム「学士課程で身に付けるべき心理学的素養に向けて」……17

１　はじめに

2008年５月、日本学術会議は、文部科学省高等教育局長から日本学術会議会長宛に、「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」[1]と題する依頼を受け、2010 年（平成22 年）７月に回答「大学教育の分野別質保証の在り方について」を取りまとめ、同年８月に文部科学省に手交した。同回答において、分野別質保証のための方法として、分野別の教育課程編成上の参照基準を策定することを提案している。これに基づき、2013年（平成25年）日本学術会議心理学・教育学委員会に「心理学分野の参照基準検討分科会」設置し、学士課程における心理学分野の参照基準の策定を進めてきた。

心理学教育は、優れた研究者の養成に留まらず、科学的な現代心理学の専門基礎教育を身に付け、心理学の近接領域の専門知識を修得した質の高い職能人材を養成し、彼らをして国民生活の幅広い分野で活躍させるという使命を持っている。今般、その審議結果を本報告としてとりまとめたことから、心理学を開設している大学の教育課程編成の指針をはじめ、各方面の心理学についての理解を深めていただけるよう、以下にその詳細を公表するものである。

２　心理学の定義

(1)　心理学の定義

心理学は、心とは何かを問い、心のはたらきを明らかにする学問領域である。そのために、人間が外界からの情報を取り入れ、理解し、最終的に適切な行動を取るにいたる過程を現象的に、機能的に、また、それを支える脳の機能にまで遡って明らかにすることを目的とする。こうした意味で、心理学は、人文学的な「心とは何か」という疑問から出発し、心理学独自の方法論のみならず、他の自然科学諸領域、とりわけ、医学、生物学、脳科学で開発された様々な手法をも駆使して、実証的、検証可能な形で心の実態に迫る。また、人間の心のはたらき、行動は、多くの場合、他者との関係性によって規定され、様々な社会的・文化的な枠組みの中で機能するものであることから、心理学は社会科学諸領域とも深い関係を持つ。また、心理学は、こうした基礎的な学問領域であると同時に、基本的な問いへの探求から生じてきた様々な知見を、教育、福祉、臨床、産業、情報技術などの多様な場面へ適用することを目指す実践的な学問としての側面を持っている。

(2)　心理学の領域

心理学の領域は、これまで、心のはたらきを探求する基礎的領域と、現実生活の場で生じる心や行動に関わる問題解決を図る実践的領域に分けられてきた。しかし、心理学の発展とともに、様々な社会的な要請に応える形で、その研究内容や対象の範囲が広がりを見せてきている。そのため、様々な領域が生まれ、活発な活動を繰り広げている。また、基礎研究と実践場面の相互作用が活発化したため、基礎と応用という二分法もあまり意味を持たなくなりつつある。

心理学の領域を概観するための参考資料としては、公益社団法人日本心理学会が、心理

学領域の学士課程卒業生に対して心理学の専門科目を学んだことを認定する認定心理士資格取得単位認定基準の科目群分類［５］や、日本学術会議の心理学・教育学委員会の「心理学教育プログラム検討分科会」と「健康・医療と心理学分科会」により 2008 年に公表された「学士課程に置ける心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて」［６］と題する対外報告の基準に挙げた科目群がある。

本報告の目的が、学士課程における心理学分野の参照基準を示すことにあるので、上記の認定心理士資格基準［５］や対外報告に示された科目群［６］などを参考に、各学部、大学、学科の特性により自主的に選択して、教育課程に組込むことが望まれる。ただ、大まかには、心理学教育で取り上げられる領域は、各分野における具体的な内容を論じる専門知識領域と、これらの領域を支え、全領域に共通する方法論を論じる方法論領域の二側面から分類することができる。この分類に従って、現代心理学の諸領域を述べると、以下のような領域定義ができる。

①　専門知識領域

専門知識領域は、文字通り心理学の中核をなし、概念的知識に関する説明理論が含まれ、研究法がある程度確立し、研究対象が定まっている専門領域である。日本学術振興会の科学研究費助成事業の系・分野・分科・細目表にある社会心理学、教育心理学、臨床心理学、実験心理学の４つは、この領域の代表的専門科目であるが、これら以外にも列挙できない数の専門知識科目があり、これらが、各大学、学部、学科の特性に応じて、それぞれの心理学教育の教育課程に組込まれている。

②　方法論領域

この領域は、心理学が実証的な経験科学である精神物理学として誕生した歴史的経緯から、上記の中核的専門領域を支えて、行動や反応を実験や観察を中心とした心理学独自の科学的方法として発展してきた領域である。方法論領域という基準で分類したが、心理学においては手法と内容は不可分のものであり、中核的専門知識の領域を発展させる上でも重要な役割を果たしている。

これらは、一般には馴染みの薄く、心理学の領域というイメージのない側面がある。しかし、心理学を学ぶ態度を育む必須の技術修得領域で、認定心理士資格単位認定基準では、心理学教育の基本主題として位置付けられている。その細かな内容説明は省略するが、心理学における研究法や技法の項目には、調査面接、観察、実験などのテータ収集法、指標としての生理測定法や情報処理法、心理検査法、また量的分析法としての統計法と質的分析法としてのプロトコル分析などが含まれており、これらの方法は、上述の中核的専門知識領域にあげた専門領域で、その領域の目的に応じて適宜活用され、当該領域の発展に寄与している。

3　心理学に固有の特性

(1)　心理学に固有な視点

心理学の最終的課題が、人間がどのように考え、感じ、行動するかに関する心の仕組みと成り立ちを解明し、それを踏まえて、心の適応的意味を明らかにすることにあることから、心理学のあるべき姿は、純粋科学からの課題解決の要請だけでなく、現代の社会が抱える問題や、現実の社会に生きる人間が抱える心を中心とする社会的課題の解決という社会的要請にも応える役割を持っている。

したがって、心理学は、純粋科学的な知見である「学問知」と、現実社会での実践から得られた知見である「フィールド知」とが、双方向の密接な関係性を持ちながら、純粋科学からの課題と現代社会に生きる人間が抱える課題とを探求することが特徴となる。「学問知−フィールド知」という枠組みは、従来の「基礎－応用」、あるいは医学領域における「基礎－臨床」の区分と類似しているが、「基礎」から「応用」へ展開するという一方向性ではなく、また現実社会での課題解決から、一般性のある知の構造を作り上げていく双方向性を意味している。この立場に立って、本報告書では、独自の「フィールド知」ということばを用いている。すなわち、純粋科学的な知見である「学問知」と現実社会とそこでの実践に向き合う知見「フィールド知」とが、心理学の領域においては不可分な相互作用を持つことが前提となっている。

日本学術会議心理学・教育学委員会の心理学の展望分科会は、平成 22 年（2013 年）４月、報告「心理学分野の展望－人間社会の持続的発展に応える心の科学の構築－」[７]を公表し、報告の冒頭の「心理学のあり方にかかわる問題」において、①人間の心についての科学的、学際的探求の視点、②日々の暮らしに役立てる人間研究の視点、③心理学が直面している社会的課題に応える、の三つの視点を挙げている。これらを踏まえて、心理学に固有の視点を以下の３点にまとめた。

①　人間の心について科学的に探求する視点

心理学は、他の人文・社会科学と同様に、「人間とは何か」、「人間とはどのように振る舞うか」ということを考慮しながら、人間という生命体に関する科学的知識を前提に、人間の営みを見る視点が必要とされる。そのため、科学技術の知見や手法を取り入れ、人間の生活というフィールドが提示する問題を実証に基づいて解明し、それにより得られた結果を、一般の人々に発信する役割を、心理学は担っている。

この点で、生理学、ロボティクス、ゲノム的基盤を探るなどの心の科学的研究と関連しつつも異なった視点、すなわち、「我々自身の素朴な内観として心が存在する」ことや「人間に共通する心的作用や行動パターン」、「心と行動の多様性と可塑性の理解」に正面から向き合う実証的な科学が心理学であるという視点が重要である。したがって、心理学は、学際的であるとともに隣接諸学の扇の要となる役割を担う。

②　学問知とフィールド知との双方向性を探求する視点

心理学は、日々の暮らしを起点に人間の営みを考え、日々の暮らしに根ざしたフィー

ルドから問題を発掘し、研究の成果を人々の暮らしに役立てる使命を持っている。したがって、人間の身の丈にあった時間や空間の中で、人間が考えをめぐらせながら暮らすフィールドでの課題が、心理学という学問の起点になっている。

この点で、心理学は、人間の日々の暮らしに立脚し、それを発想源として、「学問知」と「フィールド知」が連携協同し、相互作用をもち、還元と再還元を反復することを可能にする学としての役割を担うという視点を持っている。教育・研究において、科学技術と実践的知識としての人間学という側面が重要である。

③　心理学が直面する社会的諸課題に応える視点

家庭内暴力、子どもや高齢者の虐待、いじめやひきこもり、閉じこもり、自殺などに現れた現代社会の諸問題は、急激で極端な少子化や超高齢化によって多様となり深刻さが深まっている。このような中で心理学は、人のための環境作りや社会の改善に専門職業人として社会貢献する役割を担っている。

これらの社会的諸問題は、隣接分野との接続をもちつつ、多様な視点から知恵と工夫を出し合いながら、常に心を生み出す仕組み（機構）に関する新しい心理学的知見や、そこから得られた心理学の諸理論や技術を研究・開発し、教育することにより解決する必要がある。したがって、現代社会が抱える諸問題の解明と解決に向けて、人間学的背景を持ちながら、人間と環境との相互作用を理解し、心のはたらきの実証的研究や科学技術や実践的知識の改善を図ることが、心理学の固有な視点となっている。

⑵　方法論における独自性

現代心理学は、心の諸現象を対象にする学問的性格上、人文・社会科学の知見を視座に置くが、生命科学や情報科学、理工学などの自然科学の知見を積極的に取り入れながら、「心とは何か」を考える学問領域である。人文・社会科学、自然科学の諸学を結び付ける扇の要としての役割を担う上で、感覚・知覚心理学、心理学統計、数理心理学、学習心理学、発達心理学、教育心理学、臨床心理学、社会心理学、産業心理学、認知科学などの領域で発展してきた固有の方法－心理量を測る術－を持つことが重要である。また、日々の人間生活の中での心の諸現象の実証的解明を可能にするには、因子分析や推計・検定のような統計法や諸現象を数理的に表現する方法の活用、厳密な実験計画に基づく法則定立を目指す研究法の確立、調査や観察、面接などにより現象を捉え質的に個性記述を目指す研究方法の活用といった種々の方法を、生命科学や理工学の科学技術的方法、医学や教育の臨床的方法などの多様な方法と融合させ、柔軟に駆使することが必要である。このような点で、心理学の方法論的独自性が認められる。この方法論的独自性は、心の科学という「学問知」からフィールドへの応用と、フィールドから発想した「フィールド知」による心の科学の育成という双方向的な観点が核となっているので、その存在意義があると言える。

(3) 心理学の役割

① 学としての厳密性と人の幸福の両立を目指す諸学の要としての役割

現代社会は、新技術の急速な普及、グローバル化の進行により、個々人が目標とする自己や、豊かな社会生活に関する理想を実現する可能性がこれまでになく増している。一方では、人間疎外の進行、社会格差の増大、超高齢社会の出現といった問題が複合することによる歪みを蓄積している。このような社会の複雑で急激な変化を人間に適した方向に導くために、学術的な対応が求められている。技術、経済、教育、文化などを包括する社会システムを人間に適合させるためには関連諸分野における知見をまとめる必要があり、その際に心理学は要としての役割を果たす。心理学は、基礎研究と実践・応用研究との区別にとらわれず、学としての厳密性と人の幸福を求める姿勢とを、両立させるべきである。そして、人間がどのように環境に適応し、どのように社会を構成し、そのためにどのように情報を処理し、その際にどのような制約を受けるかを、日々の暮らしというフィールドに立脚し、証拠と論理に基づいて解明すべきである。

② 状況に対応するいろいろな行動の普遍的事実を見いだす研究法の開発

心理学においては、人間とは何かを考察し、人間の主観的体験や個人によって異なる傾向などを、できるだけ客観的に、かつ定量的に捉えるために、先人が努力を積み重ねてきた。その結果、自然科学とも、人文学とも異なる、独自の研究手法が開発されている。その根底には、すべての人に、発達、意識、知覚、学習、記憶、思考、動機付け、感情などの共通の働きを前提にすることができるという合意がある。しかし、人は同じ状況において、同じ行動を取ることも、異なる行動を取ることもある。また異なる状況で、異なる行動を取ることも、類似した行動を取ることもある。その中に普遍的な事実を見出すべく、様々な研究手法を開発することも、心理学の役割である。これまでに、実験現象学、精神物理学、行動主義的方法、脳機能計測、質問紙法、尺度構成などの研究手法、それに関わる統計学的・数理的手法が開発され、改良を加えられている。

③ 個々に異なる人の特性の複雑な面を捉える

人および人が構成する社会を鑑みると、人それぞれを個別のものとしている特質に詳細に注意を向ける必要もある。特に、人格心理学、異常心理学、犯罪心理学、臨床心理学、教育心理学、発達心理学および医療に関わる心理学といった分野において、このような視点が重要であり、そのために、人を相互に異なったものにしている生物学的・環境的要因に焦点を当てて、知的能力、人格、自己概念などを測定する方法が開発されている。

臨床の現場においては、ひとりひとりの脳の損傷の在り方が異なることや、精神症状が多様であることなどを無視できず、個別の対処や治療法が必要であることを踏まえた上で、症例の検討が進められている。それ故に、特異な事例の記述から、重要な見解が導かれる場合がある。これら臨床の現場での特異な事例について、個々人の特性の複雑な面を捉えることも心理学の重要な役割であり、この観点から、価値観、興味、態度、

人格特性、知能、適性、学習・発達の特性など心理学的測定による評価がなされるのである。個々に異なる人の特性の複雑な面を捉える上では、研究内容と研究手法との整合性を常に配慮しなければならない心理学の重要な側面である。

4　心理学を学ぶすべての学生が身に付けることを目指すべき基本的な素養

(1)　心理学分野の学びを通して獲得すべき基本的な知識と理解

学士課程で心理学を学ぶ場合、教養教育の一つとして心理学を学ぶ一般学生と、心理学を専攻する学部・学科生とでは、獲得すべき知識と理解に質的にも量的にも違いがある。ここではまず一般学生が獲得すべき最も基本的な素養について述べ（①〜④）、ついで専攻学生が獲得すべき心理学に固有な知識と理解について述べる（⑤〜⑥）。[1]

教養教育としての心理学は、２ないし４単位で修得することが一般的であり、限られた授業時間の中で広大な心理学の領域をまんべんなく学ぶことは事実上困難である。また、高校までの中等教育で心理学を体系的に学ぶ機会はない。そこで専攻生以外で教養科目として心理学を学ぶ大半の一般学生にとっては「最初で最後の心理学」の中で心理学のエッセンスを獲得せねばならない。そのような大学生が身に付けるべき素養をあえて４点に絞るとすれば次のようになるだろう。

① **心のはたらきとは何か**：我々は心を通して環境を認知し、自己を知り、環境に働きかける。このことを実証に基づいて理解する。

我々は感覚、知覚といった心的過程を通して環境を認知し、記憶や学習を通じて自分と環境の関係を知る。そして我々は心を介して自己という内的世界を知り、社会環境を含む外部環境に応答し、行動を通して積極的に環境に働きかける。人という生命体が世界の中で意味を持つのは、心のはたらきを介するからこそである。ただし、我々の心は常に意識化されるものではなく、無自覚的、潜在的な心の作用があることも理解する必要がある。

また人間には豊かな感情があり、欲求や動機付け（意欲）と共に、生活を営む上で人間行動を適応的に調整する。心は大きく「知」「情」「意」の３つの側面から構成されるが、心理学ではこれらのはたらきを実証に基づいて修得する。

② **心と行動の普遍性**：人間には誰にでも共通する心や行動パターンがあり、それらが一般的な法則や原理で説明されることを理解する。

ほとんどの人は喜びを感じるとしかめ面をせずに微笑んだり笑ったりする。晴天のもとの石炭は月夜の雪よりも輝度が高いにもかかわらず暗く見える。このように個人や文化を超えて人間に共通する心の作用があることを理解し、その背景にある一般法

[1] 教養教育あるいは専門科目としての心理学とは別に、他分野の専門科目の中で心理学的素養が求められる場合もある（例えば法学における「法と心理学」、教育学における「教育心理学」、情報学における「認知科学」、医学における「人の行動と心理」など）。ここではそこで求められる素養について個別に論じないが、各分野の専門家と心理学の専門家の協議を通じて教育内容が定められることが望まれる。

則や原理を学ぶことは重要である。外界の物理量は、一定の範囲内では、法則性を持って心理尺度に変換され知覚される。経験を通じて行動が変容する学習のプロセスにも基本的な法則性や規則性が存在する。人間の記憶にも一般的な法則や制約が存在する。人と人の間で基本的なコミュニケーションが成立するのは、各人の心に共通の基盤があるからであり、相互の心を認識し理解することが可能だからである。

③　**心と行動の多様性と可塑性**：心的過程には個人差や文化差といった多様性が存在し、個人の中でも発達的変化や状況による揺らぎがあることを理解する。

前述のように心と行動には一般的な特性があるが、それと同時に多様性や可塑性がある。パーソナリティのように一人の人間の中では一貫性がありながら、個人ごとには明らかに異なる心理・行動傾向が存在するし、知能のような知的遂行能力においても個人差が存在する。文化差に基づく心や行動の多様性も大きい。同一の個人の中においてさえも、心や行動はつねに同じではない。心や行動は年齢と共に発達し、社会的状況や文化の影響を受け、それぞれの文脈によって変容することを正しく理解する必要がある。

ただし、心や行動に多様性や可塑性があるということは、心や行動がいかようにも任意に変化しうることを意味するものではなく、様々な制約が存在することも理解する必要がある。

④　**心理学の社会的役割**：心理学は実社会の中で多様な役割を果たし、社会に貢献していることを理解する。

心理学は人間を理解する上で基礎となる重要な学問分野であるだけでなく、社会において応用され、社会に役立っている。心理学研究が応用される代表的な領域としては、鑑定や証言などの法に関わる行動、犯罪防止と矯正、消費行動などの経済心理、リスクマネジメント、人事労務管理、学習や教授法などの教育心理、新生児から高齢者まで発達に関わる諸問題、工業デザインや人間工学、災害心理、交通心理、心の健康と不適応に関するカウンセリング､臨床医学との連携などと数多くの応用例がある。教養教育としての心理学では、これらのうち出来れば複数の例について学ぶことが望ましい。

限られた授業時間の教養教育の中で、①～④の詳細にまで踏み込む必要はないが、一般学生が心理学を学ぶ意義を要約すると、人間全般、自己という個人、そして個人と社会という三層における心のはたらきの学びを通して包括的、総体的な人間理解が深まること、さらに心理学が実社会と密接に関わり社会に貢献していることを理解することである。

心理学を専攻する学生は、上述の①～④に関する学修を深めることに加えて、次の２点の素養を身に付ける必要がある。なお、以下の要点は教養科目の心理学の中でも可能な限り言及・紹介されることが望ましい。

⑤ **心を生み出す仕組み（機構）と心理学の諸理論**：２（２）で前述した心理学の諸領域について、心理現象を生み出す仕組み（生物学的・認知的・社会文化的機構）と当該領域における諸理論について正確に理解する。

教養教育の心理学では授業時間数に限りがあるため、受講者は心理現象の背景に横たわる仕組み（メカニズム）や心理現象を統一的に説明する理論体系については部分的にしか学ぶことが出来ない。他方、専門教育としての心理学では、学生は、心理現象の基盤となる生物学的・認知的・社会的機構、および心理学の主要領域における一般法則や理論（モデル）・学説を修得する必要がある。心理学理論に関する学びは、各領域の学史と共に学ぶことによって一層理解が深まるだろう。現代心理学の諸領域は、それぞれエビデンスに基づく実証研究を基本としている。ただし、ある一人の人間（特定の一個人）や個別の現象を全体的に捉えようとする場合には、実証的なアプローチだけではなく、力動的・現象学的なアプローチや質的（ナラティブあるいはエスノグラフィカル）な研究法も不可欠である。

心の生物学的機構に関連して、近年、脳科学（認知神経科学）の目覚ましい進歩により、特定の脳の活動と心的機能の対応付けが進んでいる。今後、脳活動に関する理解は心理学教育でも必須となるだろう。しかし、現段階では、脳活動と心理過程の対応関係は明らかにされつつあるが、特定の脳部位の活動と特定の心理機能との因果関係を明確に示すまでには至っていないことに注意を払う必要がある。

⑥ **心理学的測定法と心理アセスメント、心理学実験・実習の修得**：直接、目に見えない心のはたらきを言語報告や行動を介して測定する方法、心理アセスメントを用いた心の量的・質的記述、実験法による心理的因果関係の解明などを学生が自ら体験して修得する。

これらはいずれも心理学に固有の方法論であり、人間を実証的に理解する上で不可欠なツールである。心理学的方法や技法の修得は、心理学を実社会で応用していくときにとくに有用であり、心理専門職で必要とされる基礎能力となる。人間工学における感性評価、臨床医学における心理アセスメント、カウンセリングにおける面談・評価法、発達検査、人事労務管理における能力測定、実験的手法による行動評価など枚挙にいとまがない。

心理学の専門課程では、上に述べた心理学に固有の知識の修得だけでなく、隣接分野との接続についても学ぶ必要がある。心理学の専門性を備えた上で、他の分野と協働していくことが、現代社会からの要請となりつつあり、欧米ではすでに、心理専門職という役割でチームの一員として活躍することが高い社会的評価に繋がっている。専門性というタテを深めると同時に、他分野とのヨコの連携を見通せる能力を身に付けることが求められている。

⑵ 心理学分野の学びを通して獲得すべき基本的な能力

心理学を学修した学生は、次のような基本的な能力を身に付けることができる。

①　心理学に固有の能力

心の諸現象とその多様性について客観的、検証可能な形で記述し、検討する手法を学んだ学生は次のような力を養うことができる。

ア　人間を総体として客観的に理解する能力

心という、人間においてとりわけ固有に進化した認知能力についての知識と実証研究の成果に基づいて、人間を総体として客観的に理解する能力が育まれる。

イ　心の多様性と普遍性を理解する能力

心の持つ知・情・意といった３つの側面について、個人差、文化差といった多様性とともに、生得的、獲得的制約から生まれる普遍性を理解することができるようになる。

ウ　人間と環境との交互作用を理解する能力

環境（自然や社会）の中で生きる人間は環境に働きかけるとともに、環境から影響を受けることを理解できるようになる。

エ　人間に関する専門職業人として社会貢献する能力

人間の様々な側面について客観的に理解する能力は人間を対象とするあらゆる現場における実務に生かすことができる。

②　ジェネリックスキル[2]

心理学において心の多様性と普遍性、客観的な研究法を学んだものは実社会において以下の汎用的な能力を身に付けることができる。

ア　人間を複眼的に見る力

心理学の学びを通じて心のはたらきの諸側面と心の多様性について学ぶことによって、人間を一面的でなく多面的に、単眼的でなく複眼的に見て、理解する能力が備わる。

イ　批判的実証的態度

書かれていることや人の話をうのみにするのではなく、ほんとうにそうなのか検証する実証的態度が身につくはずである。

ウ　問題発見・解決能力

未解決の問題を発見し、それを適切な方法で解決する能力を身に付けることができるようになる。

エ　コミュニケーション能力

自分の考えを明快に説明し、聞く人を説得するための発表技術、情報リテラシーの力を身に付けることができる。

以上の力は心理学の専門家として生きる場合にも、社会に出て活躍する場合にも、有用なものである。

---

[2] ジェネリックスキル：分野に固有の知的訓練を通じて獲得することが可能であるが、分野に固有の知識や理解に依存せず、一般的・汎用的な有用性を持つ何かを行うことができる能力［1］

５　学修方法および学修成果の評価方法に関する基本的な考え方

⑴　学修方法

日本学術会議心理学・教育学委員会の心理学教育プログラム検討分科会対外報告「学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて」［６］では、学修方法の分類として、まず、指導目的を研究内容（コンテンツ教育）の知識修得を目的とする科目としての「知識修得」と、各種の心理学的研究技法や技術を学ぶことを目的とする「技法修得」の科目に分け、その下で実施される実際の授業を基礎科目と専門領域科目と位置付けて、心理学の授業科目を整理している。

しかし、本参照基準においては、心理学教育で実施される科目の具体的な形については、各大学・学部・学科における教育課程の目的および利用可能な資源に従って、判断・選択されるという立場に立つことから、ここでは知識修得や技法修得に関する学修方法の特徴と、そこで配慮されるべき項目について述べる。

①　講義

知識修得に関わる科目の多くは講義として実施される。基礎科目としては、オリエンテーションとしての心理学概論（心理学史を含む）と心理学研究法、方法論の基礎となる心理統計やテスト構成・質問紙構成法などの講義が含まれる。専門領域科目には、中核的な専門領域の中から必修・選択科目として設定される科目の説明理論の講義や、実習の前提となる観察・面接法の技法理論の講義などが含まれる。これらの講義科目は、現代心理学の潮流と心の科学への取組みの基礎的理解を深めることを目的としている。

いずれの講義も、単なる事実列挙にとどまらず、どのような文脈の中でそれらの知識が必要とされてきたのか、それらの知識がどのように具体的に利用されるのかが学修者自身によって理解され、再構成できるよう、科目間相互の関係性に注意深く言及していく必要がある。

②　演習・セミナー

講義で得られる知識や概念の内容について、その出現背景・経緯と文脈、その制約条件を知り、より深いレベルで意味を把握し、その結果、自らが妥当性のある方法で利用できる知識・概念としていくために、それらをもたらした先行研究について、理解を深める必要がある。具体的には、オリジナルの文献を自分で調べ、場合によって追試のための実験や観察を行い、それについて報告し論議しあうことにより、心を研究するための学問知とフィールド知の双方向性の理解を図る場が必要である。

学修形態としては、専門雑誌論文や著書の講読演習、特定分野の課題の実験実習に関する演習、専門領域の研究計画や方略を討議するセミナーなどが含まれる。いずれの科目においても、学修者は「ミニ研究者(見習い研究者)」として自身による思考・実践の機会を持つことと、他の学修者との議論の機会を与えられることが肝要である。

③　実験・実習

研究手法としての技術修得を目標とする実習科目として、実験・実習がある。基礎科目としては、方法論の体得を目的する心理学基礎実験、統計処理・実験機器操作を実践的に修得を目標とする心理学実験、データ収集およびフィールドワーク、事例研究など質的分析を修得する心理学演習などが必要である。加えて、心理学を学ぶ上で必要な学術的技能の修得を目的に、情報収集・文献検索、論文講読・論文執筆、問題・展望・考察などをまとめて表現していく過程などを修得させる実習や演習が含まれる。専門領域科目では、心理アセスメントの基礎を修得する技法理論と心理面接の基礎を修得する心理面接基礎などの授業科目がある。これらは、専門領域科目との関係で種々な手法があることから、各教育実施機関の教育目的に依存して、多様な授業方法が設定される。これらの実験・実習は、演習・セミナーに含めて実施される場合もある。

いずれの場合も、純粋な「ノウ・ハウ」の修得を目標とするのではなく、講義科目や演習・セミナーなどの内容科目との関係性を明示・例示しながら、問題解決のための方法論としての理解や倫理的配慮・考察の重要性を併せて必要とすることを強調していく必要がある。

④　卒業研究・卒業論文の作成など

①から③の学修の成果を、自分自身が行う研究活動として結実させ、人の「心」に関わる基礎知識や専門的な知識・技能を活用した研究を実施し、論文を形作っていくために、卒業研究・卒業論文の作成は大いに推奨する必要がある。その規模や実施方法については、各機関ごとの条件や方針によって異なるが、研究を企画し、計画を立てて実施し、まとめていく過程で、研究倫理など研究実施上の重要な問題を学び取っていくことも学修の目的となる。またフィールドの中の問題を捉え、抽象化し、先行研究や知識・概念、可能な方法論と結び付けて研究を実施し、その結果を問題解決のための考察に展開して、それを文章あるいは口頭発表として表現をしていくという一連の過程を体験することは、それまでの心理学の学修内容を、その後の生活・活動に生かしていくための重要な実践になると考えられる。

(2)　評価方法

評価は、教育の質保証のエビデンスとして重要な役割を果たしている。特に、評価方法の運用に当たり、次の２点を考慮することが必要がある。

①　学士力に繋がる評価方法の改善

評価は、上記３種の学修方法により学修者が履修した授業の修得程度や、卒業研究・卒業論文の仕上がり内容に対して行われる。したがって、各授業のシラバスは、４の（１）で心理学に基本的並びに固有な知識と理解として挙げた①～⑥を参照に、それぞれの授業の学修目標を掲げると同時に、各授業で、どのような能力が養成されるかという到達目標を、４の（２）に示した心理学に固有の能力やジェネリックスキルを参考にして、

授業に応じ適切に選択し、明示することが重要である。特に、到達目標を明示することは、授業においてどのような能力を達成できるかについて、学修者自身が知る上での重要な手掛りとなる。それと同時に、教育する側は、各学修者の学修成果をどのように高めるかという教育方法を考える上で重要である。この点から、評価方法を実質化するということは、学修者が履修授業で養われた基本的能力、すなわち学士力を、学修成果から学修者自身が認識できるようにするだけでなく、教育する側が、学士力を具体的に明示するための教育改善を促すことにに繋がることである。

②　学修成果の説明責任を高める評価方法

学士力という観点からすると、履修授業の基本的な知識と理解については、学修者がどの程度「〜が説明できる」かということが、また、基本的な能力については、どの程度「〜ができる」ということが、学修成果として求められる。したがって、教える側は、授業に含まれる１つの到達目標について、「最低はこれくらい」から、「最も学修成果が上がっている」のレベルまでを、評価段階として具体的な事項として簡潔に示す必要がある。このような評価段階のある到達目標を通して、学修者は自身がどの程度の学修成果を上げているかを理解できると思われる。

これまでは、学修成果が得点成績や段階評価などによって示されてきた。しかし、学修者自身が学修成果を具体的に説明するためには、得点評価による学修成果のみでは十分とは言えない。すなわち、学修者に求められるのは、学修成果について自身の説明責任を果すことである。この点を補うには、授業期間終了後、学修者が履修授業について学修到達の程度を自己評価することが必要である。この自己評価には、先に述べたような学修到達目標の具体的な段階を、教育する側が用意しておく必要がある。これに基づいて、学修者は自身がどの程度の到達目標に至っているのかを自己評価し、心理学教育で何を学んだかを認識することが可能となる。

その結果、学修者は、「心理学を学ぶことで身に付けるべき基本的素養」についての説明責任を果たすことが容易になり、自己の学士力の認識に繋がってくる。さらに、教育する側としても、授業の具体的な到達目標を示せることは、自身の授業についての評価の妥当性について、説明責任を果たすことになる。このように学修者と教育する側の双方が、評価方法を通して、心理学教育の学士力とは何かという問題に答えるえることにより、心理学教育の質保証に繋がることが期待される。

６　市民性の涵養をめぐる心理学的教養と心理学の専門教育

⑴　現実問題に対する心理学の関わり

現代社会は、地域、文化、人種、宗教、人口、環境、政治、経済、教育などの要因が複雑に絡み合っており、多くの学問領域がこうした状況のもとで発生する問題の解決に向けて努力を重ねてきた。心理学も、これまでの研究や実践で得られた知見を基礎にして、いじめや不登校など深刻な社会問題の解決に一定の貢献をしてきている。また、近年の大規模災害や事故を契機にして、基礎的な心理学においても実生活の中の諸問題の

解決に向けて、その知見を役立てようとする気運が強まっている。

心理学を学ぶことによって身に付けることができる素養や能力は、人々の市民性を涵養し、それを基礎にして様々な社会問題の解決に寄与するものと考えられる。すなわち、市民性を「自己の精神的成熟を求め、ポジティブな人間関係を維持し、よりよい社会の実現に向けて協同して活動する意欲を持つこと」と捉えるなら、心理学が「心とは何かを問い、心のはたらきを明らかにする学問であることから、こうした心理学の学修を通じて身に付けた素養や能力は、自らの心のはたらきに対する洞察によって精神的成熟を高めたり他者とのよりよい関係を構築・維持したりすることに役立つだけでなく、他者と協力して社会問題の解決に向けた活動を実践しようとする意欲を高めることが期待できる。こうした意味での市民性の高揚は、心理学を学修した個人が豊かな社会生活を営むことに資するだけでなく、様々な職業における積極的な活動を通じてよりよい社会を築くことに貢献する。

一方で、現状では、世間一般の人々がイメージする心理学と実際の心理学的研究・実践には大きな隔たりがあるため、問題の解決に際して心理学に過大な期待が寄せられたり、逆にその有用性に疑問が投げかけられたりすることも少なくない。一般の人々が教養としての心理学を「正しく」身に付けるように働きかけていくことが重要な課題となっている。心理学関係の書籍の出版やメディアによる紹介も以前とくらべて格段に多くなり、これらが市民性涵養の一部を担うようになったが、現状では十分な水準に達しているとは言い難い。この点で、心理学教育を担う者は、学士課程における心理学教育によって、心理学の素養と能力を身に付け、社会においてそれらを適切に生かすことができる者を数多く輩出することはもとより、社会における心理学の役割について真摯に検討を重ね、研究・実践の成果を広く社会に訴える努力を続ける必要がある。

(2) 市民性の涵養に関わる心理学教育の役割

心理学は、高等学校では系統的に心理学を学ぶ機会がないため、心理学に関する素養は学士課程の教養教育または全学共通教育を通して身に付けることになる。ここで心理学の素養と能力を獲得した人材は、心理学の効用と限界を十分に理解しながら自らの市民性を涵養し、それを様々な場面で役立てるだけでなく、心理学の知識を直接的・間接的に伝達することを通して広く人々の市民性を高める働きを担うことになる。

そこで、大学の教養教育における心理学の教育は、社会との関わりを強調しながら幅広く心理学の素養を身に付けられるようにすることが目標となる。学修すべき内容としては、心理学における主要な専門分野の概要、それらの基礎にある心理学研究法の概要が欠かせないものとなる。また、学修意欲を高め、社会における心理学の重要性を理解させるために、現実生活と関連付けた内容を組み入れたり、現代社会の諸問題を心理学的観点から捉えられるようになることを学修目標や学修成果として設定したりする工夫も必要とされる。将来的には、中等教育に心理学の科目が導入されることが望ましい。それが実現されて、大学の教養教育との連続性が確保されれば、以上のような心理学の学修によって、社会性の涵養はさらに効果的なものになると期待できる。

心理学の専門教育においては、教養教育に比べて深いレベルの素養や能力が修得される。すなわち、心理学の各分野における概要や様々な研究法を学ぶことに加えて、専門とする分野においては自ら問題を設定し、実証的方法によって得られたデータに基づいて検討を加えるという経験を積む。こうした経験を基礎にして培われた素養と能力を持つ者は、研究職のみならず、医療・保健、福祉、教育・発達、司法・矯正、産業をはじめ様々な職業分野において活躍することが期待されている。今後、国家資格によって心理学の素養と能力を担保し、その期待に応えられる環境をさらに整備することが求められている。また、心理学に直接関わらない職域においても、心理学を学ぶことによって獲得される様々な知識とスキルは、職務において発生する問題を心理学的視点から捉えて解決に導いたり、好ましい人間関係を構築・維持したりする側面を通じて、務めを全うすることに貢献する。

＜参考文献＞

［1］ 日本学術会議、回答『大学教育の分野別質保証の在り方について』文部部科学省高等局長への回答）． 2010年

［2］ American Psychological Association. APA guidelines for the undergraduate psychology major. Version 2.0 2013 年 {http://www.apa.org/ed/precollege/about/psymajor-guidelines.pdf}

［3］ Dun,D.S.,McCarthy,M.,Baker,S.,Halonen,J.S., & Hill IV.G.W., Quality undergraduate psychology programs. American Psychologist, 62, 650-670. 2007 年

［4］ Quality Assurance Agency for Higher Education. Subject benchmark statement Psychology. Third ed.2010年 {http://www.qaa.ac.uk/Publications/InformationAndGuidance/Documents/Psychology2010.pdf}

［5］ 公益社団法人 日本心理学会認定心理士資格認定委員会 日本心理学会認定心士資格申請の手引き 第４．１冊子版. 2007年

［6］ 日本学術会議 心理学・教育学委員会 心理学教育プログラム検討分科会 対外報告：学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて.2008年

［7］ 日本学術会議 心理学・教育学委員会 心理学の展望分科会 報告 「心理学分野の展望−人間社会の持続的発展に応える心の科学の構築−」2013年

＜参考資料１＞

心理学分野の参照基準検討分科会審議経過

平成 25 年（2013 年）

５月 31 日　日本学術会議幹事会（第 174 回）
大学教育の分野別質保証推進委員会心理学分野の参照基準分科会設置、委員の決定

７月３日　大学教育の分野別質保証推進委員会心理学分野の参照基準分科会（第１回）
委員長、副委員長および幹事の選出について
今後の進め方について

８月９日　分科会（第２回）
「参照基準作成の手順と検討スケジュール」

９月 26 日　分科会（第３回）
参照基準案の検討
「心理学とは何かに関する委員の意見陳述と質疑」

12 月５日　分科会（第４回）
参照基準案の検討
「報告書骨子素案の審議」

平成 26 年（2014 年）

２月６日　分科会（第５回）
参照基準案の検討
「報告書原案の修正とシンポジウム予定について」

３月 26 日　分科会（第６回）
参照基準案の検討
「報告書の最終決定案とシンポジウム開催について」

５月 25 日　分科会（第７回）
参照基準案の検討
シンポジウムの進行について
「報告書査読提出に向けての修正について」

９月 25 日　大学教育の分野別質保証委員会（第 10 回）
心理学・教育学委員会心理学分野の参照基準検討分科会報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準　心理学分野」承認

＜参考資料２＞

公開シンポジウム「学士課程で身に付けるべき心理学的素養に向けて」

１．主　催　日本学術会議心理学・教育学委員会心理学分野の参照基準検討分科会、心理学・教育学委員会、心理学・教育学委員会心理学教育プログラム検討分科会、社会のための心理学分科会、心の先端研究と心理学専門教育分科会

２．後　援　公益社団法人日本心理学会

３．日　時　平成２６年5月２５日（日）１３：３０～１６：００

４．場　所　東京大学法文二号館二番大教室（本郷キャンパス）

５．分科会　２５日(日)１１時より開催予定

６．開催趣旨

「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準・心理学分　野」の素案を提示し、日本学術会議関係者のみならず、広く一般の意見を聴取することを目的とする。

７．次　第

１３：３０～１３：４０

Ⅰ　経緯と趣旨説明　利島　保（日本学術会議連携会員、広島大学名誉教授）

１３：４０～１５：３０

Ⅱ　テーマ別報告

１　「心理学とはどのような学問か」
佐藤隆夫（日本学術会議連携会員、東京大学大学院人文社会系研究科教授）

２　「心理学固有の特性とは何か」
長田久雄（日本学術会議連携会員、桜美林大学大学院老年学研究科教授）

３　「心理学を学ぶ全ての学生が身に付けることを目指すべき基本的素養とは」
長谷川寿一（日本学術会議第一部会員、東京大学理事・副学長）

４　「心理学分野の学びを通して獲得すべき基本的な能力とは」
箱田裕司（日本学術会議第一部会員、京都女子大学発達教育学部教授）

５　「市民性の涵養をめぐる心理学的教養と心理学の専門教育」
安藤清志（日本学術会議連携会員、東洋大学社会学部教授）

１５：３０～１６：００

Ⅲ　質疑・討論